

ひとを「信じる」必要はありません

まぐまぐ殿堂入り・日刊メールマガジン

「今日のフォーカスチェンジ」第2728号
(2011年4月19日発行)より

長いこと、子どもたちの演劇活動に、
かかわっています。そのなかで、私
がつくづく思うのは、「子どもは信用
できない」ということです。(笑)

稽古のあいだじゅう、いつも、はらは
らさせられます。「まだここまでしかで
きてない」「こんなんでも本番どうなる
んだ」「もっと本気を出せ！」そんな
思いはしょっちゅうです。

ところが、本番。子どもたちは、みご
となまでに、私たちを裏切るのです。

みんなのところがひとつになって、
本気で、そこにいる姿が、どうしようも
なくまぶしいのです。これまでの稽
古のどの回よりも、最高の演技をして

くれるのです。

もちろん、稽古だって、手抜きをして
いるわけではないのです。でも、積
み上げていかななくてはならないこと
が、山のようにあり、ついつい、課題
と思うことばかりに、目がいってしまう
のです。

本番の輝く舞台を見ながら、「うそつ
き〜！」「これを稽古のうちに見せろ
よ〜」などと、うれしい悪態(笑)をつ
きながら、あらためて思います。この
変容を信じられるから、活動をつづ
けてきたんだなあ。

私たちは、日常のなかで、「事実」を
見ているように思っていますが、本
当はそうではありません。自分の「信
じている」ものを見ているのです。

もっと言うと、自分がそれまで築きあ
げた価値体系や信念体系にもとづ
いて、判断しているだけなのです。

私たちは、稽古のなかで、絶対に子
どもたちは、変わる！最高の舞台を
つくってくれる！と、固く信じていま
す。そして、そうなるように、全力で
はたらきかけます。

かたちとして、充分でないところの指
摘はしますが、子どもの可能性その
ものを、うたがったことはありません。

それは、同時に、私たちが子どもとど
のように向き合うか、ということでもあ
るのです。

子どもの可能性を本気で信じて向き
合うとき、子どもたちはそれにこたえ
てくれます。子どもたちが、不完全燃
焼のような舞台をしてしまうとしたら、
それは私たちの責任なのです。

「ひとを信じる」というとき、私たちは、
そのひとの何かを「信じて[いるので
はなく、そのように見ている自分を

「信じて」いるのです。

本気で自分を「信じる」なら、目の前
にどのようなかたちがあらわれようと、
自分の内がわに照らしてみればい
いだけです。そして、それにたいし
て、自分がどうあるかを、決めればい
いだけです。

というわけで、今日の結論です。ひと
を「信じる」必要はありません。代わり
に、自分を「信じて」ください。「信じ
る」自分として生きてください。

そしたら、それにふさわしい現実が
あらわれます。楽しみですね！

●日刊メールマガジン「今日のフォーカス
チェンジ」(かめおかゆみこ編集・発行)は、
2003年11月1日創刊。2011年3月、
2700号達成。3秒読める携帯版もあり。
無料講読は「かめわざ快心塾」から♪

<http://kamewaza.com/>